

螻蛄の斧 (とうろうのおの)

社会システム変化への介入 part 1

1990年 京都児童相談所 内外事情 第三回

団 士郎

仕事場D・A・N / 立命館大学大学院

ここに書いているのは児童相談所(昨今は国民の誰もがその存在を知ることになった)が、まだまだ「児童相談所」の説明からしなければならなかった頃の仕事の話である。十年一昔と言うが、1990年といえば二十年前。今、大学生の人達はやっと生まれた頃だ。

そこで行われていた子どもの福祉や健全育成に向けた仕事が、今では考えられない古臭いものであったら、課題はあるにせよ現在は、進歩したものだという結論になるだろう。しかし世の中というのは概ね、そんな風に進化するものではない。仕事、中でも業務の枠組みというのはなかなか変化しない。職場の悩みを聞いてみたら、昔も同じじゃないかなんて話はよくあることだ。中味は変わっても実は堂々巡り、こんな事もよくある話だ。そして、注意を怠ると世の中は進歩しているはずなのに、仕事は稚拙化、劣化する。名人、職人がいる業界ではよく聞く話だ。

この二十年を振り返ると、児童相談所の仕事はそれまでがそうだったように、やはり時代の風にあおられて、業務の様相を変化させてきた。計画的構築性などなかなか持てないまま、目前の課題に翻弄されてきたのではないかと思う。

近年ずっと騒ぎの中心にある児童虐待だが、現在の陣容で児童相談所が危機介入から家族再統合、そして防止・予防まで語るのには世迷い言にさえ見える。そんな難題をふっかけられて犠牲になっている後輩職員達を気の毒だと思って見ながら、同時にちょっと彼らにも知恵や勇気が足りないのではないかと思ったりもする。

私は4カ所の児童相談所に合計21年勤務した。当時、このキャリアは殊更珍しくはなかった。もっとベテランの児相職員は全国に沢山いたし、採用から退職まで35年以上、児相一筋という先輩もいた。私自身、二十年余働いてもマンネリしていると思うことなどなかったし、惰性で働いていた記憶もない。そういう意味では特殊な仕事、職場だったかもしれない。

2010年11月、「週刊少年サンデー」で『ちいさいひと～青葉児童相談所物語～』が三週にわたって掲載された。新採の児童福祉司が主人公のコミックスである。設定にも驚いたが、内容にはもっと驚いた。私は浦島太郎だと思った。「人事異動で久しぶりに児相に復帰しました」と語る人が、「様変わりぶりに驚いています!!」というのを何度聞いたことだろう。時代の変化が必ずしも進化だとは言えない。みんな頑張っているのに、事態が良くなっているようには思えない、これが今日ではないかと思う。そんな時には温故知新。少年サンデーに対抗するわけではないが、今回は別冊マンガも用意した。もし届くものがノスタルジーでしかなかったら、私の筆力の未熟だろう。現実には確かに豊かだったのだ。

1990

三月

3/2 FRI

夜、一時保護所に中学生が来ていて宿直当番。一緒に飯を食ってテレビを見る。ほとんど自分から話さない少年。

3/3 SAT

家中に爬虫類を飼っている登校拒否中学3年生の家族との最終面接。就職先が決まって、その給料をあてにして、分割払いで新種のトカゲを50万円で買ったそうだ。頑張れるといいな。

京都府はずいぶん後まで、一時保護中の子どもの夜間対応を、職員が交代でしていた。だから担当ケースの少年・少女と一晩過ごすことがけっこうあった。

勤務としては長時間拘束（三十二時間）であり、他府県の実態は刻々変化している中でのことだった。

自分たちの負担軽減のために、一時保護期間をできるだけ短期に設定しようとする無意識の協同や、簡単には一時保護を開始しない傾向もあった。

いいか悪いかは、おそらく両面である。手段を乱用しないメカニズムは、こういう動機にも支えられているといえる。専任宿直員のいる状況なら、あまり仕事がないのもいかなものかという判断も働こうというものだ。

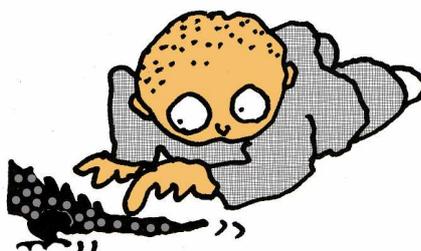
もっとも、近年では都市部も地方もあまり変わりなく、一時保護所はどこも、要保護児童の対応に満杯の大賑わいらしい。

この頃まだ、「登校拒否」という言い方が主流だったのか・・・と、これを読んで思った。「不登校」が常識になって、二〇年にはならないのだな。

そしてここに出てくる、トカゲ五十万円という単位に驚く。やはり世の中全体にバブルの匂いがある時代だったのだ。

たしか既に飼っていた南米産の爬虫類を業者に引き取ってもらって、差額を足して手にいれたトカゲだった。

「の子が
爬虫類だ！」



この一家に家庭訪問したときのことも忘れられない。玄関を開けたとたん、家中温室状態だった。爬虫類放し飼いの家など、後にも先にも経験がない。

3/5 MON

重症心身障害児施設「H学園」との話し合いで、T川・N川両課長と出かけた。「児」とつく施設であるにもかかわらず、年長者51歳、十代の方はわずかだという。隣接する養護学校の分校は、数年後には在学対象者がなくなると聞いた。

就学猶予、免除などという言い方で、教育権保障されなかった重度障害者に、さかのぼって教育保障していた養護学校も、ぼつぼつそんな対象者がなくなってきていたのだろう。

重症心身障害児施設というが、入所者は皆、成人してしまうこの時期には、隣接の養護学校分校も入学者がなくなりかけていた。立ち話で分校関係者は私たちに、学齢期の重症心身障害児の入学斡旋を強く求めていた。

3/7 WED

実習生の最終日。午後半日かけて、振り返りをする。彼女達は14日間の驚きの連続の中で、ずいぶん正確にものを言えるようになっている。

3/8 THU

昨日から、京都府心理判定員会議をや

っていて、今日のコメンテーターを依頼されていた。心理職課長がレギュラー参加しなくなって、少しずつ以前とは違ってきている。

3/13 TUE

久しぶりに心理検査をした。食べないで衰弱して、入院をするという小学6年生女子。どう進めていくかは、これから考える。

こんな実習生の中から将来、児童相談所で働くことになる人が何人かあった。仕事が魅力的にみえていたのだろう。働いている人が生き生きと輝いていたと感想を述べた学生もあった。

児相職員の平均在職期間が三年未満と聞く今、外部の人や学生達にはどんな職場に見えているのだろう。

当時、県市によっては、大学と共同して事業を始めたり、スーパーヴァイザーとして大学教員を招いている所も少なくなかった。しかし京都府に関して、我々はそういうスタンスは全くとらなかった。

仕事は児童相談所に属しているが、研究はその個人に属していると思っていた。大学教員の関心でやってこられて、満足したからとほかにいってしまわれる児童相談所として、置き去りにされているような実態を少なからず目にしていた。だから我々のところでは、何でも自分たちでやろうと思っていた。

心理判定員会議では様々な工夫や提案を形にしてきた。「月刊・心理テストカンファレンス」という冊子もその一つだった。この会議とは別に月例実施していた心理テストカンファレンスを、担当者が小冊子にまとめて、百力所あまりの関係者、機関に、守秘お願いのための通しナンバーを入れたものを送っていた。

研究者ではないが、現場もこんな風ががんばっているのだと知らしめたかった。そして上芝功博さん、氏原寛さんなど、何人かの業界先輩の方々から反応や書籍、カンパをいただいて、とて

も嬉しかった記憶がある。

アノレキシア（拒食症）女子との家族面接をすることになる出会だった。それまでも、痩せ症の女子ケースに会ったことはあった。しかしその時は、個人セラピーを実施していた。（効果のほどは何とも言えないが、時間と共に変化した）。

このケースでも初期は相互描画法を用いて個人面接していた。小康状態の保てる半年ほどの期間を過ごした後、母親の強い希望で一家四人の合同家族面接を実施することになった。

ランチセッションなどという面接場面で食事をする方法も、ミニチュチンの本を参考におこなってみた。思いがけない発見や落胆もあったのだが、ここで詳細には述べない。

3/14 WED

秋に京都で開催する「全国児相研セミナー」の現地実行委員会の通知を作成。午後はABC朝日放送ラジオへ。卒業シーズンということで、テーマは自立、旅立ち。旅立たれる側の課題に焦点をあてて話す。

児相研セミナーは2010年（青森大会）に至る今も継続している自主的研究グループである。私もできるだけ参加するようにしている。「研究発表」中心の集まりではなく、児童相談所を取り巻く諸問題について、情報交換や検討することを目的にしている。

この日の記述を読みながら気づいたことだが、相談判定課長の私は当時、相当に優秀な課員に支えられていたようだ。

午前中全国セミナーの文書作りをし、午後は休暇を取って月に一度のラジオ出演をしていたのだから、日常業務は実に順調に進行していたということになる。

私なりにみんなの支え役ではあったと思うのだが、課員にとっては、近接異分野の風をあちこちから持ち込んできてくれる小隊長だったのだろうと思った。この時代の課員とは、この後もずっと、なんやかやと出会う機会がある。

そして私は、二十年も前から、子ども達の自立不全が気になって仕方なかったのだと思い出す。このテーマは近年、ますます問題拡大してきているやに思える。そしてこの依存性を、私も含めた心理職、対人援助職者が一貫して助長してきたように感じられて仕方がない。

3/16 FRI

情緒障害児短期治療施設「静岡県立吉原林間学園」に講演に行った。新幹線の新富士駅から霞がかかった富士山が正面に見えた。長男が公立高校に合格したことを、名古屋のプラットホームから公衆電話で聞いた。息子の元気な声がとても嬉しかった。

当時、情短施設は京都府にはなかった。京都市は情短・青葉寮が京都市児相に隣接してあった。

この頃、吉原林間は、生活と治療と教育の三本柱の金食い虫ぶりに、議会で追及されていた。少ない在籍児童に莫大な金をかけて、効果はどうかのだという県議会での質問だった。

確かにこの時代、情緒障害児短期治療施設(ほぼ公立、職員は公務員)は裕福な時代のさらなる一歩という位置づけの施設だった。

今、情短施設は社会福祉法人施設として、虐待児の受け皿として、全国で増えている。



ここで高校入学を喜んでいた長男が、今、本誌で連載もしている団遊である。二十年というのは、そういう時間なのである。

仕事で出会うひきこもり青年。「高校時代の嫌な思い出が・・・」と語るが、どれほど変化の可能性に満ちたその後の時間を無為に過ごしてきたことかと思う。

人が自身の説明(言説)に執着してしまったり成長も変化も拒否できてしまう。抵抗できないのは身体変化と加齢くらいのものだ。それでも一生は過ぎてしまうのだから、無為を助長するような支えにウカウカ一票を投ずるものではない。

我が子や自身の人生がそうやって費されていてもいいと覚悟が決まるなら自由だが、他人の人生の浪費だけに平気というのは酷いのではないか。

3/22 THU

受理判定措置会議 母に急死された男の子二人が家庭内暴力と登校拒否でどうしたらいいのかわからないという父親の相談があった。

それから母子家庭の母親の素行が悪くて、三人姉兄妹それぞれが非行という相談もあった。

離婚、事故、癌、その他、いろいろな原因で核家族が維持できなくなる。みんな辛い。

夕方、徳島県児相の判定員が家族面接の実際を見せて欲しいと訪ねて来訪。

ケースは日々多様に飛び込んで来て、展開していた。対象を特化しない、家族、子育てにまつわるあらゆる相談が寄せられていた。

この日に限らず、児童相談所における家族療法の視察という枠組みで、あちこちの県から訪問があった。この日の判定員は、他用務があって関西に来たついでに、一度見せて欲しいという趣旨の来訪だった。

この時期の視察の特徴の一つは、年度末の予算消化行動であり、せつかくなれば京都見物でもし

てくればいと、職場の合意で出張派遣されている人も少なくなかった。そのため、見に来ているのに、あまり家族面接には関心がないなんて人も含まれていた。



3/23 FRI

来週、療育事業・琵琶湖一周サイクリングに登校拒否小・中学生8人を連れていく。その候補者の一人と面接。この子達はいろいろ小さなことを気にして、すぐ感情を害してしまったりする。グループの一員になって一週間旅をするなんて、なかなかだ。

3/26

サイクリング参加者7人とその第1人が、欠けることなく集合。みんな登校拒否だ。

私は出発三日後の夜、22時前の列車で、米原乗り換えで木之本駅に行って、ピックアップしてもらい、サイクリング部隊に合流した。明日、明後日と伴走車でビデオ撮影担当だ。今夜は賤ヶ岳ユースホステル泊。

3/31

昨日までの走行実績から見て、最終日の予定行程は無理だろうという予想が昨夜のミーティングの大勢をしめた。それでも、朝5時30分起き、6時10分出発。そして結果は予定の膳所公園に12時に着いた。60km近くを昼までに走りぬいた。子どもも大人もみんな顔付きが違っている。いいサイクリングだった。

琵琶湖一周サイクリング

さて、今回のメインメニューである。この手の療育事業はあちこちの児相で、たくさん行って

いた。時代がそんな風向きだったのだろう、様々な療育事業メニューがあって、競い合っていた感覚もある。

京都府でも、集団になじめない子のための合宿(集団指導プログラム)や、非行少年達を四国・四万十川に一週間連れて行って、河をゴムボートで下る事業(スタッフにとってあまりにハードだったので、一回きりになったが思い出深い)など、様々なことをした。

どのような意味があり、どんな成果があったのかと聞かれると、実証的には答えられない。しかし実際に渦中で一緒に行動して、手に入れたモノは限りなくあった。

琵琶湖一周サイクリングは7~8年も(毎年、春と夏)継続したのではないだろうか。不登校を中心に、家族面接、カウンセリング等の経過を持った子達の、区切りイベントとして位置づけられていた。

春休みと夏休み後半に、対象児童がゼロでない限り、参加者一人から出発していた。

閉ざされた面接室の中で、デリケートな心の中だけの援助では、子どもも家族も再生しきれないことは気づいていた。両者を組み合わせた援助プログラムの発想は、我々のオリジナルなどではなく、考え方として諸外国に既にあった。我々のところではメニューを何にするか、そこが独自性を出せる余地だった。

琵琶湖一周するという達成感の明確さ、一日中、湖を眺めながら疾走する爽快感、湖岸各地の青少年施設の整備充実と、申し分のない条件が整っていた。京都の児童相談所ではあるが、滋賀県琵琶湖を大いに活用させていただいた。そして、参加者の予後は、期待に十分応えてくれていたと思う。

ただ、この事業で私たちが悩ましたのは予算の問題だった。基本的には庶務・会計のところさばいてくれる話である。しかし彼らのルールでは当然、事業計画を立て、予算要求をして、予算の付いた事業を執行する。

ところが臨床家でもある私たちは、「来年の

夏に何名の不登校児をサイクリングに連れて行くことになるかなど、前年に分かるはずがない！」と言っていた。

そして直前になって、「今年は五名になりそうだ」とか、「一人だけかもしれない」とか言っていた。

庶務・会計の人たちには迷惑なことだったろう。だが、何でも予算だけで決めるのは弱いことだ。

他にも予算絡みではこんな事もあった。随行職員もそこそこの人数が必要になる。その職員達の時間外勤務手当がまかなえないという話が会計からあった。サイクリングは業務だから、その勤務に対する手当が当然発生した。二四時間張り付きの一週間分である。伴走職員を減らすとか、滋賀県は近いから職員は日帰りに出来ないかという提案もあった。

しかし私はそういう対応を選択しなかった。皆で話し合っただ手当てを返上した。合宿中の宿泊費や食費をカバーするだけで参加してくれるよう話をつけた。この結果、予算の問題で庶務・会計と、調整しなければならないことは減った。

当時、特に中央児相は、超勤手当の完全支給について、組合との協議が繰り返されていた。役所と言うところは今も、何かを実施しようとする「予算がない！」といわれ、いったん予算が付くと、「何が何でもやってもらわないと困ります！」と実施を迫られる、こんな事態がなくもないだろう。

*

この数年の療育事業をまとめて後年、月刊「少年育成」誌（当時の名称は「少年補導」）に二年（24回）にわたってマンガの連載をした。それを掲載しようと思った。しかし本誌に入れ込むと膨大なページ数になるので、昔懐かしい月刊誌の付録本の感覚で、別冊付録にすることにした。

マンガにはカラー頁も含まれているので、プリントアウトするとコストがかさむと思うので、モニター上でごらんいただくのが合理的かと思う。

⑤巻40頁は完成させたが、問題は⑥巻である。年末年始に作業できればと思っているが…。

（では、別冊マンガを）

そして今、2010.12.12

家庭内暴力をのりこえる
「家族臨床理論」の構築にむけて
虐待を解決する取り組みの
最前線からの問題提起

と長いタイトルの公開シンポジウムに出かけた。同僚の中村正さんと大阪市の久保樹里さんが企画したものだ。大阪を中心に、このエリアで働く様々な機関、組織の人たちが、ちょっと一堂に会しすぎといった趣の、贅沢なイベントだった。

報告は又正式なものがどこかで行われるだろうが、私はちょっと義理もあって、前日東京で6時間のワークショップを行い、東京泊になった翌朝6時50分の新幹線で大阪に向かった。八重洲富士屋ホテルにいたのは前夜11時半チェックインだったので、6時間半だけだった。

しかしこの会は、出席できて本当に良かった。登壇者と参加者で、会場はぎっしりだった。児相とその周辺で問題意識を共有しながら、協力協働しようとする人たちがたくさんあることに触れた。

全国の児相がみなこんな風だと言えないのは重々承知だが、新しい時代の新しい風は起きていて、そこには私の時代に吹かせた風の匂いも少し感じられた。だからこのマガジン連載（20年前の日誌）の中に、普遍が含まれていることも確認できた。

問題を調査することや指摘することは比較的たやすい。手におえる部分を切り取って、限定的に言及すれば、発言はそれほど無意味化しない。

しかしその結果を、具体的に業務デザインにして世に問うのは簡単ではない。現実には刻々結果を見せつけるし、そこで一定の成果を上げるのは容易ではない。

それに新しい試みはいつも、それまでのことを

批判することになる宿命を背負っている。そのため、たいした意味もなく、変化したくないと訴える組織や人が少なくない。

「このままではどうしようもないでしょう！」等と叫んだところで、相手も世の中も変化したりはしない。変化可能な部分から手を付けて、ひたすら働きかけ続けるしか、社会システム変容への道はない。

私はこの会場でしきりに自分がこれまでしてきたことを振り返っていた。そして、「蠅螂の斧」の第二部に書こうとしている継続的地域ネットワークの事を思っていた。（詳細はいずれ）

2010年6月に始まったこのマガジン。今までなかったものが、このように持続的に場を獲得して、様々な現場のコンテンツを運んでくることになった。その場の管理人として3ヶ月に一度、世の中の変化（新たな物が一つ付け加えられる点において変化である）を作り続けることになった。

私は今、自分のやりたいことをやる自由を授けられている。ありがたいことに協力、協働者もたくさんある。ならば、ここに何か一つでも時代の進歩を刻まなければならないのではないかと考えて、今朝も新幹線の車中、編集作業を続けていた。

そして会場で、いろんな取り組みや、論拠に基づいて奮闘する、私よりずっと若い人たちの群れに出会った。

嬉しく、有り難いことだなぁと思って最後部の端の席で、喜びに満ちて座っていた。